

# 転生した俺の弟がイル ミだった件

Re.

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

うん、おかしいとは思つていたんだ。

だつてさ、家は日本人なら目にしたことがないくらいの豪邸で  
執事は山のようによるし

父親はでかいしロン毛だし

母親はなんかゴーグル付けてるし

祖父は一日一殺とか書かれた服持つてるし

終いには暗殺者とか言い出すし

電流流されて拷問の訓練始まるし!!!?

そして気づいたのは俺が4歳のとき

「まあ！この子の名前はイルミにしましよう!!貴方！」

「お前の弟だ。嬉しいか、カイ」

「う、うん、嬉しいよ！」

カイ＝ゾルディックが俺の名前：

ぞ、ゾルディック家じやねえか!!!!

から始まる俺のほのぼの（？）ストーリー

# 目次

第1話『終ワリ×ト×始マリ』

2話『昔ノ話×ト×流星街』

|

9 1

# 第1話『終ワリ×ト×始マリ』

椅子に座つてこの前手に入れた古文書（正確には友人に譲り受けたものだが）を読んでいた男は顔を上げて口角を緩やかに上げる

後ろでゆっくりと音を立てずに開くドアに顔を向けずに

「ノックはどうしたんだい、キル」

と声を掛けると後ろからは「ゲツ」と声が聞こえた

「カイ兄は何で直ぐに気付くんだよ…気配だつて消してるのでさ」

キルアは頬を膨らませながら俺の座るソファの横に座るとまたブツブツと呟いた

「それで、今日はどうした？」

読みかけの本を閉じながらカイが尋ねる

「…何が」

「俺の部屋に来るときは大体嫌なことがあつたときだろ」

キルアは元から大きい目をさらに丸くさせると図星をつかれたように顔を逸らした

「べ、別にそんなんじやねえよ!!」

「はいはい、俺が悪かったよ。俺はあまり遊びに来なくなつたキルが来てくれて嬉しい

けど？」

「オレは…忙しそうだから邪魔になるかなって…」

「俺はお前を邪魔だなんて思わないさ、分かるだろキルア」

「ん」

コクつと頷いて横を向いた耳がほんのり赤いのは指摘しないでやろうとカイは見なかつたことにした

「で、ミルキにでも虐められたのか？」

「あんなブタ君怖くないっつーの!!」

「こら、きちんと名前か兄貴で呼べ」

「…ミルキじゃないよ」

「じゃあイルミ?」

「…」

「クスツ、本当に昔からキルはイルミが苦手だな」

クスクスと笑うカイは眉を寄せるキルアの頭を撫でながら軽く咎めた

「あんまり嫌つてやるなよ。お前を大事に思うが故の行動なんだから」

「それは分かつてるけどさ」

コンコンとなるノックの音にキルアは体勢を直した

「兄さん、入るよ」

それは正に先程まで話していたイルミの声で、逃げ出そうとするキルアを左手で押さえつけながら「ああ」と返事を返した

「（カイ兄離せよよ！）」

「どうどう」

「馬か俺は!?」

「兄さん、キルを見なかつた？」という声がキルアを見つけて止まつた

「ここに居たんだ、キル」

「…まあね」

「キル、オレはお前に兄さんの邪魔になるからあまりここに来るなつて言つたよね？」

無表情で近寄るイルミをキルアから庇うように間に立つてイルミの頭を軽く叩いた  
「悪いなイルミ、俺が呼んだんだ」

「…兄さんが？」

「ああ、最近弟が構つてくれないから寂しくてな」

「イルミ、俺もお前も最近仕事で外に出ることが多かつただろう？今度俺とゆつくり食事にでも行こうか」

イルミのオーラが治まつたのか震えていたキルアは息を整えていた

「うん、オレも行きたいし楽しみにしてるよ」

到底楽しそうだとは見えない表情だったが家族であるカイにはそれが分かつた

「キルアも訓練続きで疲れてるみたいだし今日の訓練は不問にしてくれ」

「…まあ、兄さんが言うなら」

「ああ、いくら才能があつても休息は必要だよイルミ。お前も今日はしつかり休め」

「分かつた」

キルアを一瞥してドアを静かに閉めたイルミを見てキルアも緊張がとけたようだ  
ぐでつとソファに沈んで「ありがと、カイ兄」と消えるような声で礼を言つた

「サボりも程々にな」と笑つた彼を見ながらキルアは（もう絶対イルミのときにはサボら  
ねえ）と心に誓うのであつた

「ミルキ、居るか？」

扉から聞こえるノックの音にいつもは眉を寄せるミルキだったがその声の持ち主に  
気付き身体からは想像出来ない素早い動きで扉を開けた  
「兄貴、どうかしたのか？」

中に入るよう促したミルキは向かいの椅子に座ると首を傾げた  
「これ要る？」

カイが差し出した箱を見るとミルキは奇声を発した

「こ、これ!! 魔法少女の限定フイギュア!? か、カイ兄! これどうしたんだよ!!」

世界に10個しかないレア物でファンの間では50億ぐらいは余裕で値段がつく激烈物であることなどカイは勿論知らないのであつた

「もうすぐお前の誕生日だろ? この前暗殺した人の部屋のケースに保管されてたからつい取ってきた。ミルが好きかなって」

「あ、兄貴! ありがとう!! マジでありがと!!」

暗殺者というよりも盗賊といえる振る舞いだがそれは友人に影響を受けたせいかもしないと突っ込むのはここには居らず、ミルキは大事そうにフイギュアを抱えながら喜びを表現した

「はは、俺もお前が喜んでくれて嬉しいよ。悲しいことに誕生日の日には仕事でいないからね」

ミルキは元からカイに対して兄弟の中では1番好意を持つていた

イルミは怖いしキルアは生意気、アルカは…、カルトはあまり関わりがない  
だが、カイは兄弟の誰一人も巣廻せずみんなを大事にしてくれている

「カイ兄、情報とかで困つたことがあつたらオレに言つてくれよ！兄貴のためならちやんとやるから！」

決意を胸に宣言したミルキに現金なヤツだなあと笑つて

「そのときは頼むよ」

と返して部屋を出たカイは（うん、雇つたかいがあつたな）と頬を緩ませた  
丁度胸ポケットの電話が揺れて歩きながら通話を押した

「どうした、クロロ」

『いや、大した用ではないがこの前の依頼の品は喜んで頂いたかと思つてな』

「丁度今渡した所なんだ。なかなか反応が良くてな、頼んだかいがあつた』

『全く…弟にやるプレゼントの為にオレ達

“蜘蛛”にファイギュアを盗んで来いだなんて言う奴は初めてだ』

呆れ笑いを遠慮なく声に出すクロロに携帯越しにカイは肩を竦めた

「そんな奴俺以外に居たら殺されてるだろ」

『フツ、確かにな』

「ホントに助かつたよ、報酬はあれだけでいいのか？」

『200億をあれだけというお前の金銭感覚にため息が出そудよ』

「依頼したことは内密に頼むよ。カツコつかないからさ」

『そういう契約だからな。：アイツらが「たまには顔を出せ」——だそーだ』  
「了解、今度また直接礼を言いに行くさ」

『ああ、またな』

切れた電話をポケットに入れたカイは土産のことを考えながら自分の部屋に足を運ぶのであつた

通話を切ったクロロは周りで待ち構えている仲間を見ると頭を抑えた  
「ねえ団長！ カイはなんて？！」

「弟は喜んだそうだ、今度直接礼を言いに来るらしい」

その答えに満足したのかシャルナークはルンルンと部屋に戻つて行つた

「ハツ、当然ね。私達召使いじやないね」

「とかいつてこの前の盗みのときやる気満々だつた癖に、よく言うぜフェイ」

「落ち着きなよ、これだからバカ男どもは」

「マチ、言いすぎよ」

「それなら良かつたぜ！ なあノブナガ」

「ああ。つてウボオーは殺ししかやつてねえだろ」

クロロはそんな仲間を横目で見ながら廃墟の外に映る月を眺めた  
「(オレ達が出会つてもう何年も立つがお前は何も変わらないな…カイ)」

## 2話『昔ノ話×ト×流星街』

俺が7歳のとき、つまりイルミは5歳だつた。

そのときとあるマフィアから暗殺依頼が届いて暗殺に慣れるには丁度よいと家族からあれよこれよと流されて流星街に行くことになつた。

街のものでは無いが最近好き勝手に暴れ回つて人を殺しているらしい

母さんは「まあ！私の故郷なのよ！カイちゃん!! カイちゃんなら心配いらないわね

！」

と同じことを10回ほど捲し立てて話してくるので正直参つた

「行つてこい」

「気をつけてのおー」

俺の家族は誰も止めないらしい

まあ、罪のないものまで殺してるのなら仕方がないと荷物を纏めて廊下を歩いていた  
とイルミが立つていた。

「兄さん、行くの？」

「ああ」

「そう」

イルミは顔は無表情であまり感情は読めないがその分オーラに出るらしい「早く帰つてくるよ」と頭を撫でれば目を細めた

辺り一面ゴミだらけ

出来れば今日のうちに現れてくれるといいんだが：

まあ、適當な所で寝ればいいかと思考を働かせて歩くうちに視線を感じた

「（うん、つけられてるな。オーラからして子供：俺とあまり変わらないか少し下かな…数は7）」

よそ者に厳しいとは聞いてたけどお金狙いかな？

でも暗殺に巻き込むわけにはいかないしね。今のうちに離しておくか

「出ておいで」と微笑みながら静かに振り返ると舌打ちと共に黒髪の少年が出てきた

——正確にはナイフを振り下ろしてきた

「おー、元気だね。的確に首を狙うとかセンスいいなあ」

「…俺じやなかつたら死んでたよ」

変形させた手でナイフを払い左手で拘束

後ろに回り込んでいた賢そうなもう1人の黒髪も右手でいなす

「フェイ！」

フェイと呼ばれた小柄な少年を掴んだまま5m後退。

「目的は？」

リーダー格なのだろう、後ろにいた黒髪が答えた  
「……食料だ。俺はクロロ・ルシルフル。貴方が掴んでいるフェイタンを返して欲しい」  
ゴミ山に隠れていた残りの5人も人質を見捨てられないのか警戒しながら出てきた

「いいよ」

さらつと答えた俺に彼等は目を見開いた

正直そうな子は「…は!?」とまで口にしている

手に抱えていたフェイタンという少年をそつと地面に下ろし

「ほい」と背を押した

「…オマエ何考えてるね」

鋭い目付きで威嚇するフェイタンにフツと声を漏らして笑つてその頭を撫でた

「俺は別に君たちを殺しに来たわけじゃないよ。仕事以外の殺しはしないんだ」

「仕事？」

警戒を少し解いたのかクロロが尋ねた

？」

「ああ、俺達の近くに住んでいたやつも一人やられた。…シャル、何か知らないか？」

金髪の少年がちらつとこつちを見ると

「俺はシャルナーク！」と笑った

「確か名前はロナード・マルクスでこの前道を歩いてた男の人を殺害。その後それを見た女性も一人殺してる」

「そいつのせいでの私達はあまり自由に動けなくて食料に困ってるんだよ。あたしはマチ。いきなり襲いかかったのは許してくれないかい？」

「ああ、気にしてないよ」

「私はパクノダよ。よろしく」

「俺はフインクス。カイ、強いな！ フエイタンがあつさりやられるとはな」

「うるさいよ。殺されたいか」

「俺はフランクリンだ」

「あと俺たちの住処にウヴォーギンとノブナガがいる」

「なるほどね、食料で困つてんんだろう？ あげるのは全然構わないんだけど、頼みがあつてさ」

「なんだ？」

「俺をお前達の家に少し居候させてくれないかな？その男を見つけるまででいいからさ」

「クロロどうする？」

「いいんじやないか？別にそれぐらい。コイツ強いしな！」

「フィンクスには聞いてないね。単純馬鹿はこれだから困るね」

「ああん？」

「二人とも落ち着きなよ。俺もいいと思うよ？食料に困つてるのは事実だし」

「あたしもいいと思うよ」

「そうね、私も異論はないわ」

「ああ、俺も構わない。俺達に危害を加える気は無いようだしね」

「ありがとう、助かるよ」

　ちよつとした世間話をしながら彼等の家に辿り着くと2人の体格のいい少年が居て仲良くなつたカイだつた

「俺はノブナガ。よろしくな」

「その刀カツコイイな！ジャポン出身なのか？」

「おお！多分な」

「ははは！俺はウヴォーギンだ！クロロから聞いたが強いらしいじやねえか！後で戦おうぜ！」

「また今度な」

——そのころイルミは兄のことを考えながら兄の標的の男に少し同情するのであつた

「あーあ、可哀想。兄さんは人殺しは全然好きじやないけど一般人を殺しまくるキラーには容赦ないんだよね」